

- 第1回 オリエンテーション: 大脳の仕組み
- 第2回 脳の認知機能と情報処理
- 第3回 失語症とは: 古典分類と情報処理アプローチ 失語症状の理解①
- 第4回 失語症状の理解②
- 第5回 高次脳機能障害とは
- 第6回 子どもの言語障害の概要
- 第7回 LD/ADHDの疑似体験
- 第8回 特別支援教育での発達障害の対応としくみ
- 第9回 学習障害とは
- 第10回 発達性読み書き障害について
- 第11回 自閉スペクトラム障害について
- 第12回 自閉スペクトラム障害の言語・コミュニケーションの問題
- 第13回 発達障害のある子どもの言語・コミュニケーションの誤り分析
- 第14回 中学校・高等学校での課題と補助手段の実際
- 第15回 Languageの障害のまとめ

●評価方法

出席状況(50%)授業に関するミニレポート(数回を予定)25%、最終課題レポート25%

●受講生へのコメント

今、自由に話せている自分が、ある日突然ことばを失うとは考えにくいかもしれない。身近に言語障害のある人がいない限り、ことばの障害がどのようなものなのか、なかなか想像しがたいことだろう。しかし、失語症は誰にでも起こりうる言語障害であり、かつ誤解されやすい障害でもある。一方、高等学校でも個別の教育支援計画作成が導入されている現在、中学校高等学校の教員をめざしているなら、通常学級にいる学習障害、ADHD、自閉スペクトラム障害のある生徒についての知識と理解は必須である。

「脳だとか、言語障害の用語は聞きなれないし、難しそう」と毛嫌いせず、まず知ることから始めてほしい。そうすると、この領域の幅広さと奥深さにきっと魅了されることになるだろう

●参考文献・教材

授業でプリント配布

参考図書

「ことばと認知のしくみ」編集主幹 河野守夫 三省堂(2007)

「ADHD/高機能広汎性発達障害の医療と教育」竹田契一監修 日本文化科学社(2006)

「LD児の言語・コミュニケーション障害の理解と指導 第二版」竹田契一・里見恵子・西岡有香 日本文化科学社(2007)

「特別支援教育における言語・コミュニケーション・読み書きに困難がある子どもの理解と支援」大伴潔編 学苑社(2011)

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
242	文化理論 Culture Theory	後火4	2単位	2・3年
	旧科目名	担当教員名 野末 紀之 教授		

●科目の主題

表現文化コースに所属する大半の学生は、現代の文化現象、とりわけ「サブカルチャー」に関心があり、その中から素材を選びレポートや卒論を書く。だが、そこには依然として「作者(製作者)の意図」を問う素朴すぎる見方や、政治的社会的脈絡とは無縁な自足的観点が目立つ。この授業では、個々の文化現象への関心を説得的な論へと組み立てるためにわきまえておくべき文化の力学とその理論について講義する。具体的には、文化の歴史性、作者の意図を超えた現象間の類似、断絶や変形、ヘゲモニーと対抗の戦略、「正典」をめぐるポリティクス、人種・ジェンダー・セクシュアリティをめぐる闘争などが取り上げられることになるだろう。

●到達目標

文化現象とそれへの自分の関心を批判的に考察し、最終的に論として組み立てられることが目標である。

●授業内容・授業計画

随時演習形式を取り入れながら、いくつかのテキストを読みすすめる。

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 テキスト①第1章、第2章
- 第3回 テキスト①第3章、第4章
- 第4回 テキスト①第5章、第6章

- 第5回 テキスト①まとめと質疑応答
- 第6回 演習①
- 第7回 テキスト②第1章
- 第8回 テキスト②第4章
- 第9回 テキスト②第7章
- 第10回 テキスト②第8章
- 第11回 テキスト②第9章
- 第12回 テキスト②第11章
- 第13回 テキスト②まとめと質疑応答
- 第14回 演習②
- 第15回 レポート相談日

●評価方法

出席・発表・試験・レポートを総合的に判断する。

●受講生へのコメント

とくになし

●参考文献・教材

ジョン・A・ウォーカー、サラ・チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門』（晃洋書房、2001）、ピーター・バーク『文化史とは何か』（法政大学出版局、2008）ほか。随時、英語文献も使用。プリントを配布。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
243	表現文化論 Lecture in Art and Representation	前火4	2単位	2・3年
	旧科目名 表象文化論 I	担当教員名 小野原 教子 非常勤講師		

●科目の主題

現代における衣服／ファッションの社会的意味と文化的表象

●到達目標

人間は衣服を着る動物である。日常何気なく身に纏っているものが自ずと意味を放っている。服は言葉であり、こころは服を着るからだである。衣服／ファッションが現代の代表的表象文化であることを、講義を通して受講者は知ることとなるだろう。

●授業内容・授業計画

ファッションとは何かの基礎的理解（基本理論）、複雑化多様化する現代のアイデンティティと衣服の関係、雑誌・映像などの情報媒体とファッションの表象の問題、身体表現としてのコスチュームの分析、現代日本のファッションのグローバル的展開。

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 衣服とアイデンティティ(1)
- 第3回 衣服とアイデンティティ(2)
- 第4回 衣服とアイデンティティ(3)
- 第5回 ファッションとメディア(1)
- 第6回 ファッションとメディア(2)
- 第7回 ファッションとメディア(3)
- 第8回 グループ・プレゼンテーション
- 第9回 コスチュームとプロレス(1)
- 第10回 コスチュームとプロレス(2)
- 第11回 コスチュームとプロレス(3)
- 第12回 クールジャパンとグローバリズム(1)
- 第13回 クールジャパンとグローバリズム(2)
- 第14回 クールジャパンとグローバリズム(3)
- 第15回 まとめ

●評価方法

授業への貢献度およびタームペーパー(40%, 60%)

●受講生へのコメント

「聞く」だけでなく「話す」「読む」「書く」の四つの面から授業に積極的に関わることを期待される。
また、受講生の興味・関心などから講義内容や進行は調整されたり、グループワークを課すこともある。

●参考文献・教材

小野原教子『聞く衣服』(水声社 2011)。
その他書籍／論文など授業で適宜指示する。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
244	表象文化論	前月2	2単位	2・3年
	Lecture in Culture and Representation			
	旧科目名	担当教員名		
	表象文化論II	海老根 剛 教授		

●科目の主題

本講義のねらいは、映像作品の考察や分析のための基礎作りです。対象としては、実写映画とアニメーション、および近年のデジタル映像を扱います。扱う対象は映画作品が中心になりますが、映画以外の動画メディアの分析にも不可欠な映像リテラシーの習得にも役立つはずです。

●到達目標

この講義では、みなさんに多くの作品に触れてもらい、映像作品を考察するための言葉を獲得してもらうことが目標です。したがって、受講者の積極的な参加が求められます。なお第1回の授業の前に見ておいてもらう映画作品をポータルサイトで伝えますので、受講者は必ず対象作品を見たうえで授業に参加してください。

●授業内容・授業計画

毎回、いくつかの作品から特定の場面を選んで上映し、その場面の特徴やそこで用いられている技法を考察しながら、映画の多様な側面に光を当てていきます。また、それらの考察を通して、映画の分析に不可欠な基礎概念の導入も行います。

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 映画と運動(1)
- 第3回 映画と運動(2)
- 第4回 映画と空間(1)
- 第5回 映画と空間(2)
- 第6回 映画と時間(1)
- 第7回 映画と時間(2)
- 第8回 物語について
- 第9回 演出について
- 第10回 古典映画と現代映画
- 第11回 アニメーションの原理と表現(1)
- 第12回 アニメーションの原理と表現(2)
- 第13回 デジタル映像の現在(1)
- 第14回 デジタル映像の現在(2)
- 第15回 まとめ

●評価方法

学期末に作品分析のレポートを課す。

●受講生へのコメント

使用教室の制限上、受講希望者多数の場合には履修制限を行うことがある。その場合、表現文化コースの学生を優先した上で、残りについて抽選を行う。

●参考文献・教材

プリント配布。

掲載No. 245	授業科目名 比較表現論	開講期	単位数	標準履修年次
	Lecture in Comparative Representation	前水2	2単位	2～4年
	旧科目名 比較表現論 I・II	担当教員名 高島 葉子 准教授		

●科目の主題

民話に関する概説と民話研究の理論、方法について講義する。

●到達目標

話型やモチーフなどの民話の基本事項および民話の国際性、地域性について学ぶとともに、民話研究のための理論と方法の知識を得ることを目標とする。

●授業内容・授業計画

以下のような構成で講義する予定である。

- 第1回 導入:民話とはなにか。
- 第2回 民話の特徴: マックス・リュウティエーの民話理論
- 第3回 民話の国際話型(1)
- 第4回 民話の国際話型(2)
- 第5回 民話の国際話型(3)
- 第6回 民話の地域性(1)
- 第7回 民話の地域性(2)
- 第8回 インド・ヨーロッパ起源説・神話学派
- 第9回 民族誌学派理論
- 第10回 フィンランド学派理論
- 第11回 形態学(構造論)的分析(1)プロップの理論
- 第12回 形態学(構造論)的分析(2)ダンダスのモデル、ブレモンモデル
- 第13回 精神分析的解釈:フロイト派とユング派
- 第14回 歴史・社会的アプローチ
- 第15回 現代の民話研究

●評価方法

出席状況30%、期末テスト70%で評価する。

●受講生へのコメント

あらかじめ、少なくとも代表的な日本民話(昔話)とグリム童話の内容を確認しておいて下さい。また、講義を聞くだけでなく、授業中に紹介する参考文献を読んで自ら理解を深める努力を期待します。

●参考文献・教材

授業中にプリントで資料を配布する。参考文献は適宜指示する。

掲載No. 246	授業科目名 文化理論基礎演習a	開講期	単位数	標準履修年次
	Basic Seminar in Culture Theory a	後火2	2単位	2年
	旧科目名 表現文化基礎演習 I a	担当教員名 高島 葉子 准教授		

●科目の主題

表現文化コースでは、文学や美術などの芸術作品だけでなく、テレビ、映画、雑誌、広告など日常的に接する身近な「ポピュラー文化」をも研究対象とする。こうした広い分野の対象を研究するための理論、方法の基礎を学ぶ。

●到達目標

文化理論の基礎的知識を身に付け、理論的文献の内容を的確に要約報告するスキルを習得するとともに、学んだ概念と方法を用いて、身近な文化現象について分析し短いレポートにまとめることができるようにする。合わせて、英語の専門書を読みこなす英語力の基礎を身につけることを目指す。

●授業内容・授業計画

授業の前半で文化理論に関する入門的英語文献を講読する。後半では日本語文献について担当者がレジュメを作成したうえ

で内容を報告し、質疑応答により理解を深める。学期末には各自で興味のある題材について分析、発表を行い、レポートにまとめる。また、英語文献に関しては期末テストを行う。

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第3回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第4回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第5回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第6回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第7回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第8回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第9回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第10回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第11回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第12回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第13回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第14回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第15回 期末テスト

●評価方法

出席状況20%、口頭発表20%、期末テスト30%、期末レポート30%で評価する。

●受講生へのコメント

英語テキストは入門書であるが、十分な予習を必要とする。また、授業でのディスカッション等への積極的な参加を求める。なお、受講生は原則的に表現文化コース所属の学生に限る。

●参考文献・教材

日本語テキスト: 井上俊編『全訂新版 現代文化を学ぶ人のために』(世界思想社)。英語文献はプリント配布する。

掲載No. 247	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
	文化理論基礎演習b Basic Seminar in Culture Theory b	後木2	2単位	2年
	旧科目名 表現文化基礎演習 I b	担当教員名 高島 葉子 准教授		

●科目の主題

表現文化コースでは、文学や美術などの芸術作品だけでなく、テレビ、映画、雑誌、広告など日常的に接する身近な「ポピュラー文化」をも研究対象とする。こうした広い分野の対象を研究するための理論、方法の基礎を学ぶ。

●到達目標

文化理論の基礎的知識を身に付け、理論的文献の内容を的確に要約報告するスキルを習得するとともに、学んだ概念と方法を用いて、身近な文化現象について分析し短いレポートにまとめることができるようにする。合わせて、英語の専門書を読みこなす英語力の基礎を身につけることを目指す。

●授業内容・授業計画

授業の前半で文化理論に関する入門的英語文献を講読する。後半では日本語文献について担当者がレジュメを作成したうえで内容を報告し、質疑応答により理解を深める。学期末には各自で興味のある題材について分析、発表を行い、レポートにまとめる。また、英語文献に関しては期末テストを行う。

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第3回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第4回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第5回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第6回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第7回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第8回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第9回 英語文献講読、日本語文献の内容報告

- 第10回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第11回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第12回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第13回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第14回 英語文献講読、日本語文献の内容報告
- 第15回 期末テスト

●評価方法

出席状況20%、口頭発表20%、期末テスト30%、期末レポート30%で評価する。

●受講生へのコメント

英語テキストは入門書であるが、十分な予習を必要とする。また、授業でのディスカッション等への積極的な参加を求める。なお、受講生は原則的に表現文化コース所属の学生に限る。

●参考文献・教材

日本語テキスト: 井上俊編『全訂新版 現代文化を学ぶ人のために』(世界思想社)。英語文献はプリント配布する。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
248	表現・表象文化論基礎演習a Basic Seminar in Culture and Representation a	前月5	2単位	2年
	旧科目名 表現文化基礎演習Ⅱa	担当教員名 海老根 剛 教授		

●科目の主題

(1) 作品分析の基礎を学ぶ。特定の方法論や理論にもとづく分析の一手前にとどまり、ひとつの具体的な対象としての作品と向き合い、それを構成している表現の特徴や構造を柔軟に把握し、考察するレッスンを行う。作品は私たちの前に、ひとつの物質的なまとまりとして、たとえば書かれた言葉(小説)、描かれた線と記号(マンガ)、俳優の身体と声(演劇)、静止した光と影(写真)、明滅する映像の連なり(映画)として与えられています。この授業では、そのような物質的なまとまりとしての作品がどのように形作られており、どのような動き、出来事がそこに生起しているのかを明らかにするとともに、それを言葉によって記述するレッスンを行います。

(2) 文献調査、画像編集にもとづく簡潔なプレゼンテーションを作成し、発表するレッスンを行う。口頭発表における補助資料の位置づけ正しくを理解し、プレゼンテーション用ソフトウェアの欠点と利点を把握した上で、効果的な発表資料を作成する技術を学習する。

●到達目標

(1) 自分が感じたことを手がかりに論理的に思考することを学ぶ。(2) 口頭発表の方法と技術的補助手段の使用法を学ぶ。

●授業内容・授業計画

今回の授業では、小説、絵画、写真、映画、演劇、現代美術を扱う。それぞれのジャンルについて、指定された作品の分析を行う。また学期末には作品分析の口頭発表を受講者全員にってもらう。

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 マンガ分析
- 第3回 小説分析
- 第4回 絵画分析
- 第5回 映画作品上映
- 第6回 映画作品分析
- 第7回 演劇作品上映
- 第8回 演劇作品分析
- 第9回 写真分析
- 第10回 現代美術作品上映
- 第11回 現代美術作品分析
- 第12回 プレゼンテーション入門
- 第13回 口頭発表(1)
- 第14回 口頭発表(2)
- 第15回 まとめ

●評価方法

6回のレポートと口頭発表で評価する。

●受講生へのコメント

この授業は表現文化コースに新たに進学した2回生向けの授業です。他コースの学生は受講できません。

●参考文献・教材

作品資料は授業内で配布する。

掲載No. 249	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
	表現・表象文化論基礎演習b Basic Seminar in Culture and Representation b	前月4	2単位	2年
	旧科目名 表現文化基礎演習Ⅱb	担当教員名 江村 公 特任講師		

●科目の主題

(1) 作品分析の基礎を学ぶ。特定の方法論や理論にもとづく分析の一手前にとどまり、ひとつの具体的な対象としての作品と向き合い、それを構成している表現の特徴や構造を柔軟に把握し、考察するレッスンを行う。作品は私たちの前に、ひとつの物質的なまとまりとして、たとえば書かれた言葉(小説)、描かれた線と記号(マンガ)、俳優の身体と声(演劇)、静止した光と影(写真)、明滅する映像の連なり(映画)として与えられています。この授業では、そのような物質的なまとまりとしての作品がどのように形作られており、どのような動き、出来事がそこに生起しているのかを明らかにするとともに、それを言葉によって記述するレッスンを行います。

(2) 文献調査、画像編集にもとづく簡潔なプレゼンテーションを作成し、発表するレッスンを行う。口頭発表における補助資料の位置づけ正しく理解し、プレゼンテーション用ソフトウェアの欠点と利点を把握した上で、効果的な発表資料を作成する技術を学習する。

●到達目標

(1) 自分が感じたことを手がかりに論理的に思考することを学ぶ。(2) 口頭発表の方法と技術的補助手段の使用法を学ぶ。

●授業内容・授業計画

今回の授業では、小説、絵画、写真、映画、演劇、現代美術を扱う。それぞれのジャンルについて、指定された作品の分析を行う。また学期末には作品分析の口頭発表を受講者全員にしてみよう。

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 マンガ分析
- 第3回 小説分析
- 第4回 絵画分析
- 第5回 映画作品上映
- 第6回 映画作品分析
- 第7回 演劇作品上映
- 第8回 演劇作品分析
- 第9回 写真分析
- 第10回 現代美術作品上映
- 第11回 現代美術作品分析
- 第12回 プレゼンテーション入門
- 第13回 口頭発表(1)
- 第14回 口頭発表(2)
- 第15回 まとめ

●評価方法

6回のレポートと口頭発表で評価する。

●受講生へのコメント

この授業は表現文化コースに新たに進学した2回生向けの授業です。他コースの学生は受講できません。

●参考文献・教材

作品資料は授業内で配布する。

掲載No. 250	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
	表現・表象文化論演習 I Seminar in Culture and Representation I	前木3	2単位	2・3年
	旧科目名 表現文化演習 I	担当教員名 三上 雅子 教授		

●科目の主題

「映像に表れた都市」という主題を取り上げ、映画における都市の表象、映像によって作り出される都市イメージについて考察する。

●到達目標

本授業では近年の文化理論の知見をも踏まえつつ、歴史的変遷や社会状況など複合的視点から都市の表象を分析・考察することを学び、表象された都市像と現実との相関関係に対して自覚的な姿勢を養うことを目標とする。

●授業内容・授業計画

映画を中心にTVドラマ等を含め、「映像に表れた都市像」を考察していく。私たちが持っている「都市像」は、現実の体験からだけでなく、映画やTVなどの映像が提示する「イメージ」によって作られていくことも多い。またそうした「作られたイメージ」が現実の都市のあり方に影響を与えていく。授業の前半においては、「映画に描かれた東京と大阪」を具体的に取り上げ、分析の視点について講じる。授業の後半では、グループに分かれて特定の映像作品を取り上げ、分析を行ってもらう。

第1回 イントロダクション

第2回 映画が描く東京(1)

第3回 映画が描く東京(2)

第4回 映画が描く東京(3)

第5回 映画が描く大阪(1)

第6回 映画が描く大阪(2)

第7回 映画が描く大阪(3)

第8回 グループ発表1回目

第9回 グループ発表2回目

第10回 グループ発表3回目

第11回 グループ発表4回目

第12回 グループ発表5回目

第13回 グループ発表6回目

第14回 グループ発表7回目

第15回 総括

●評価方法

評価は、学期末のレポート(50%)および授業中の発表(40%)、さらに授業中の討論への積極的参加(10%)によって評価する。

●受講生へのコメント

演習という科目の性質上、履修希望者多数の場合には受講制限を行う。その場合は表現文化コースの学生を優先し、その後抽選をする。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

掲載No. 251	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
	表現・表象文化論演習 II Seminar in Culture and Representation II	後水5	2単位	2・3年
	旧科目名 表現文化演習 II	担当教員名 小田中 章浩 教授／中川 眞 教授 ／海老根 剛 准教授		

●科目の主題

アーツマネジメントとは、芸術と社会をつなぎ、アーティストと一般の人々のあいだの出会いと協働を組織する仕事です。この演習では、講義、ワークショップ、実習を交えて、アーツマネジメントの基礎を学びます。

●到達目標

アーツマネジメントの基礎的な理論を学んだうえで、展覧会や講演会などの企画立案を行い、実際にその企画の実現を通して、アーツマネジメントに現在求められている課題とそれにふさわしい手法を学びます。

●授業内容・授業計画

開講形式が通常の講義や演習とは大幅に異なるので注意すること。最初のガイダンスに続いて、アーツマネジメントに関する導入的な講義を行い、その後はグループに分かれての実習となる。実習における実際の作業は、授業時間外に行われ、授業ではプロジェクトの進捗状況の報告と問題点の討議が行われる。

この授業は後期に開講されるが、前期のうちに説明会を行い、スケジュールとグループ分けを行うので、掲示に注意し、受講希望者はかならずこの説明会に参加するようにしてください。また、授業は一部、不定期に行われることとなりますが、この点についても説明会で説明します。また、最終的な企画の実施は授業期間の終了後(2月後半や3月など)になることも考えられます。受講者はその点を了解の上で受講してください。

以下に15回の授業計画を掲げるが、これはあくまでも仮のものであり、実際には複数の作業が同時進行することになるので、その点に留意するように。

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 講義アーツマネジメントとは何か(1)
- 第3回 講義アーツマネジメントとは何か(2)
- 第4回 企画立案(1)
- 第5回 企画立案(2)
- 第6回 予算と実施体制の決定
- 第7回 実施時期と会場の決定
- 第8回 ゲストとの交渉
- 第9回 中間総括
- 第10回 広報(1)ウェブサイト、フライヤー作成
- 第11回 広報(2)メディアへの周知
- 第12回 実施要領の詳細と役割分担の決定
- 第13回 作品の搬入と管理
- 第14回 企画実施
- 第15回 まとめ

●評価方法

展覧会などのプロジェクトを企画立案・実施するワーキンググループへの参加度および最終的なプロジェクトの成果にもとづいて成績評価を行う。

●受講生へのコメント

この授業は、通常の「座学」の授業とは正反対のコンセプトにもとづいて実施されます。他人から教えてもらうのを受動的に待つのではなく、みずから動くことを通して学習する能動的な態度が、受講者には要求されます。企画を実際に実現するための作業の大半は、授業時間外に行われます。型破りな授業ですので、ラクではありませんが、アーツマネジメント(広くは文化を社会に届ける仕事)に関心のある学生には、やりがいのある授業になるはずですよ。やる気のある学生の積極的な参加を期待します。

●参考文献・教材

適宜紹介する。

掲載No. 252	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
	表現・表象文化論演習Ⅲ Seminar in Culture and Representation Ⅲ	前火2	2単位	3・4年
	旧科目名 表現文化演習Ⅲ	担当教員名 高島 葉子 准教授		

●科目の主題

昔話絵本について考察する。本来口承文芸である昔話を視覚メディアで伝える際には、どのような工夫がなされ、どのような利点と問題があるのかを考える。

●到達目標

絵本の表現技法についての基本的知識と、絵本の分析・研究方法の基礎を習得したうえで、具体的な昔話絵本の作品分析を行い、それを小論文として論理的に展開できるようになることを目標とする。

●授業内容・授業計画

まず、絵本研究の入門書を教材として、絵の構成、色彩、視点、語り手、絵と言葉の関係など、絵本の表現技法について学び、後半は昔話絵本に関する論文を取り上げて、担当者が要約、報告した後、全員で討論し理解を深める。最後に各自が題材として